

Title	カルルク西遷年代考—シネウス・タリアト両碑文の再検討による—
Author(s)	川崎, 浩孝
Citation	内陸アジア言語の研究. 8 p.93-p.110
Issue Date	1993-03
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16306
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カルルク西遷年代考

——シネウス・タリウト碑文の再検討による——

川崎 浩孝

目 次

はじめに

第一節 シネウス・タリウト碑文の一度目の西遷と漢文史料との比較

第二節 シネウス碑文西面1～2行目の西遷の年代

第三節 シネウス碑文南面1～7行目に見えるカルルクの位置

第四節 カルルクの二度目の西遷と漢文史料との関係

おわりに

はじめに

カルルクは7世紀から活動が活発化したトルコ系遊牧民族の一種である。これまでの研究によって当時のカルルクの主要な居住地はアルタイ山脈の西麓地域であったが、⁽¹⁾7世紀中葉にはこれとは別にモンゴリアのウチュケン地方にもカルルクの勢力が存在したことが確認されている。⁽²⁾これらのカルルク族は、8世紀のウイグルの勢力伸長に伴い、一部はウイグルに服従したものの、大部分は西方へ移動してその後勢力を拡大したといわれている。しかしカルルクに関する記述は漢文史料、突厥碑文、ウイグル碑文、そしてイスラム側の史料に断片的に見られるだけであり、その一貫した足取りは十分には明らかにされていない。そこで私は特にセミレチエ地方でこの勢力が強大化するきっかけとなったカルルクの西遷について考察してみたいと思う。なぜならこの事件こそは、カルルクが西突厥系のチュルギシュ族に代わってこの地方を掌握し、後のカラハン朝成立の基礎を築いたというカルルク史上最も重要な意義を持っているか

(1) Chavannes 1941, p. 271; 岑仲勉 1958, pp. 758-759; 内田 1975, p. 499; Ecsedy 1980, p. 26.

(2) 7世紀のウチュケン地方のカルルクの情勢については内田 1975, pp. 500-501; Ecsedy 1980, p. 33 参照。

らである。

これまでのカルルクの歴史及びその他の中央アジアの歴史に関する研究の中でその西遷について述べられた主なものを挙げると次のようになる。まずその最初のものはバルトリド氏の研究であり、それによるとカルルクは766年にはチュルギシュの可汗の居城であるスィアープ⁽³⁾(碎葉)を占領したとされている。ブリツァーク氏は、カルルクは766年にチュルギシュの遊牧地とその主要な都市であるスィアープとタラスを占領し、チュルギシュに取って代わったと述べながら、註においてシネウス碑文に見えるカルルクの西遷の記述を挙げて766年以前にもカルルクがセミレチエ地方と関わりを持っていた事を示唆している。⁽⁴⁾またエチエディー女史はカルルクが西方を征服したのは750～760年代であるとしているが、⁽⁵⁾これに対してベックウィズ氏はシネウス碑文の記述からカルルクは745年に西遷し、751年のタラス河の戦い以後はその地においてチュルギシュに代わり優勢となったと述べている。⁽⁶⁾このようにカルルクがセミレチエ地方においてチュルギシュに取って代わった時期はバルトリド氏以来の766年頃という考えではば一致しているが、それ以前の西遷のこととなるとウイグル碑文の記述の部分的な引用や漢文史料による漠然とした言及がなされているにすぎない。

また近年、薛宗正氏により「葛邏祿の崛起及其西遷」⁽⁷⁾という論文が発表されたが、この中では西遷の年代について具体的には述べられておらず、カルルク勢力の分布についても当時の中央アジア情勢に照らし合わせて不自然な箇所が多

(3) Barthold 1968, p. 201 ; Barthold 1899, p. 27.

(4) Pritsak 1951, p. 275.

(5) Ecsedy 1980, pp. 37. なおエチエディー女史はカルルクが従来の根拠地を離れて西遷したというよりもむしろ西方へ向かって勢力を拡大したと解釈しているようである。

(6) Beckwith 1987, pp. 126-127, ns. 113, 114. ベックウィズ氏はその註においてタリャト碑文ではこの西遷を746年と伝えていることを付け加え、その後のウイグルとの戦いの後、東方に残ったカルルクはその後を追ったと述べているが、その年代については言及していない。また751年のタラス河の戦い前後には既に西突厥の領域でカルルクが活動していることから、カルルクは750～760年代に西方を征服したとするエチエディー女史の見解は誤りであるとしている。

(7) 薛宗正 1991.

く見受けられる。そこで私はあらためてシネウス・タリят両碑文と漢文史料の記述を相互に比較検討し、不明な点の多いカルルクの西遷に関して特にその年代を中心に考察を加えることにする。

第一節 シネウス・タリят両碑文の一度目の西遷の記述と漢文史料との比較

漢文史料においてカルルクの西遷を伝えるのは以下の三つの記述である。⁽⁸⁾

至徳(756-58)後、部衆漸盛、與廻鶻爲敵國。仍移居十姓可汗之故地、今碎葉・怛邏斯諸城盡爲所踞。然阻廻鶻、近歲朝貢不能自通。

(『唐会要』卷100)

至徳後、葛邏祿寢盛、與廻紇爭疆、徙十姓可汗故地、盡有碎葉・怛邏斯諸城。然限廻紇故朝會不能自達于朝。

(『新唐書』回鶻伝下)

大暦(766-79)後、葛邏祿盛、徙居碎葉川。二姓微、至臣役於葛祿、斛瑟羅餘部附回鶻。

(『新唐書』西突厥伝)

バルトリド以来の研究では、これらの記述より、766年までにはカルルクはスイアーブ・タラス地方を手中に収め、チュルギシュに代わってセミレチエ地方を支配するようになったと解釈されてきた。つまり漢文史料からはそれ以上の具体的な年代を明らかにすることは不可能だったのである。

これに対してウイグル側の史料では、共に東ウイグル可汗国第二代可汗・磨延啜(747-59)の紀功碑であるシネウス(Šine-Usu)碑文とタリят(Tariat)碑文の中にカルルクの西遷に関する具体的な記述を挙げることができる。これら

(8) 『唐会要』中華書局出版・下冊、p. 1788; 『新唐書』中華書局出版・第19冊、p. 6143; 『新唐書』中華書局出版・第19冊、p. 6069。

(9) シネウス碑文は1909年フィンランドのラムシュテット氏らによってセレンゲ河の支流ハマイ河の上流域、シネウス湖付近の廢城中で、タリят碑文は1957、61、69年にモンゴルとソ連の調査団によりアルハンガイ・アイマクの西端、テルヒン河畔のタリят近郊でそれぞれ発見された。シネウス碑文の訳註はラムシュテット、王静如の両氏によって、タリят碑文の訳註はシネフー、クリャシュトルヌイ、テキンの三氏によってそれぞれなされている。本論文において、シネウス碑文に関してはラムシュテット氏のルーニックテキストに、タリят碑文に関してはクリャシュトルヌイ、テ

の碑文はその中に見える十二支による紀年の最後のものから、少なくともシネウス碑文は「鶏の年」(757)、タリアト碑文は「蛇の年」(753)以降に造られたものであり、その内容には突厥第二可汗国末期の対突厥反乱戦争及び漠北の諸部族に対する征服戦争に関する記述が多く見られる。これら二つの碑文の記述の中でカルルクの西遷に関して時期的に最も早いものは以下の記述である。

シネウス碑文, N-10 ~ 11⁽¹⁰⁾

- (10) —前略— anta kesrā taqīyū yīlqa —約28字欠— bodun —約54字欠—
その後、 鶏 の年に 民

…un tuyup
気付いて

- (11) üç qarluq yablaq saqīnīp tāzā bardī qurīya on oqa kirti
三姓カルルクは 悪意を 抱いて 逃げていった。 西に 十 姓 に入った。

layzīn yīlqa t…
豚の年に …

タリアト碑文, S-3 ~ 4⁽¹¹⁾

- (3) —前略— anta kesrā it yīlīqa üç qarluq yablaq saqīnīp tāzā
その後 犬の年に 三姓カルルクは 悪意を抱いて 逃げて

bardī qurīya on oqa
いった。 西に 十 姓に

- (4) kirti anta …di —後略—
入った。そこで …した。

この二つの記述に見える「鶏の年」, 「犬の年」, 「豚の年」はそれぞれ745年(天宝4), 746年(天宝5), 747年(天宝6)に当たる。シネウス碑文の「鶏の年」とカルルクの西遷の記述との間には大きな欠落があり、また西遷の記述の直後に「豚の年」があることから、おそらく西遷の記述の前の欠落部分にはタリアトに見られる最初のカルルク西遷の記述は746年の出来事であると断定することが

ノ キン両氏のローマナイズドテキスト(部分的にはシネフー氏のルーニックテキストも使用)に拠っている。Ramstedt 1913; 王静如 1938; Tekin 1982; Klyashtorny 1982; ШИНЭХҮҮ 1975.

(10) Ramstedt 1913, pp. 16-17.

(11) Tekin 1982, pp. 47, 49-50; Klyashtorny 1982, pp. 343, 345.

できるであろう。そしてこのカルルクが移動していった土地は西方の十姓（＝西突厥）の地であると記されていることから、その地域は天山山脈の北麓でバルハシ湖の南のセミレチエ地方と考えてよいであろう。

一方この両碑文に記された時期とほぼ同じ頃の事として漢文史料にもカルルクに関する記述を見出すことができる。それは以下の記述である。⁽¹²⁾

〔天宝〕五載十月癸巳，三葛邏祿苾伽葉護頓阿波移建啜遣使朝貢。授葉護，爲左武衛大將軍員外置，依舊在蕃。其使賜二色綾袍・金帶七事放還蕃。

（『冊府元龜』外臣部・褒異二）

この記述は天宝5載（746）10月にカルルクの葉護（yabyu）が唐に朝貢したことを伝えるものである。このカルルクの葉護の根拠地は以下の二つの記述によつて知ることができるであろう。⁽¹³⁾

葛祿與九姓復立廻紇葉護。所謂懷仁可汗者也。於是葛祿之處烏德健山者臣廻紇，在金山・北庭者自立葉護，歲來朝。（『新唐書』回鶻伝・葛邏祿条）

〔天宝十二載九月〕甲寅，葛邏祿葉護頓毗伽生擒阿布思，制授開府儀同三司，封金山王，依舊充葉護。祿俸於北庭給。其葉護妻及母並封爲公國夫人。

（『冊府元龜』外臣部・褒異二）

まず一つ目の記述からは、その君主が葉護の称号を有しているカルルクは金山・北庭地方，すなわちアルタイ山脈（＝金山）及びジュンガリア東部を根拠地とする勢力であることがわかり，またウチュケン地方のカルルク勢力はウイグルに服属したことも知ることができる。そして二つ目の記述にあるように天宝12載（753）9月にカルルクの葉護が「金山王」に封じられていることからカルルクの葉護がアルタイ地方を根拠地としていた事が確認される。しかもこれら

(12) 『冊府元龜』中華書局出版・第12冊，p. 11458.

(13) 『新唐書』中華書局出版・第19冊，p. 6143；『冊府元龜』中華書局出版・第12冊，p. 11458.

(14) 片山 1984，pp. 33, 37, n. 26. これによればこの地方のカルルクがウイグルに服属したのは744年頃のことである。

(15) 『新唐書』中華書局出版・第19冊，p. 6143 及び『唐会要』中華書局出版・下冊，p. 1788 では「金山郡王」と記されている。この時の玄宗の詔勅が見られる『全唐文』中華書局

の記述から時期的には少なくとも天宝5～12載(746-53)にわたってこの勢力はアルタイ地方を保持していたと考えることができるであろう。従って前に見たようなシネウス・タリアト両碑文に現れる746年に西遷したカルルク勢力とは別に、アルタイ地方を根拠地としその君主が葉護の称号を帯びた勢力が少なくとも753年まで存在しているのである。

このように746年以後のカルルクの勢力には、従来の根拠地であるアルタイ地方を保つもの、ウチュケン地方にあってウイグルに従属したもの、西遷してセミレチエ地方に移ったものの三つが存在したことが確認される。三番目のセミレチエに西遷したカルルク勢力についての詳細な記述は見られないが、751年に唐軍とアラブ軍との間で行われた有名なタラス河の戦いに関する記述⁽¹⁶⁾において、カルルクの名前を見出すことができる。

仙芝聞之，將蕃・漢三萬衆擊大食，深入七百餘里，至恆羅斯城，與大食遇。相持五日，葛羅祿部衆叛，與大食夾攻唐軍。仙芝大敗，士卒死亡略盡，所餘纔數千人。
(『資治通鑑』唐紀・天宝10載条)

この記述に見られるように、この戦いはカルルクが唐からアラブ側に寝返ったことにより唐の大敗に終わったのであり、ここに現れるカルルクはその位置関係を考慮すれば746年にセミレチエに西遷した勢力だと考えてよからう。そしてこの戦い以降この地におけるカルルクの勢力は徐々に拡大していったとされている⁽¹⁸⁾。

第二節 シネウス碑文西面1～2行目の西遷の年代

シネウス碑文にはさらにカルルクの西遷を伝えるもう一つの記述を見出すことができる。シネウス碑文は南面1行目から7行目においてウイグルとカルル

ノ 出版・第1冊，p. 293，「封葛邏祿葉護頓毗伽金山王制」，『唐大詔令集』商務印書館，p. 690，「葛邏祿葉護開府儀同三司制」，及び『冊府元龜』中華書局出版・第12冊，p. 11350では「金山王」と記されている。

(16) 『資治通鑑』中華書局出版・第15冊，p. 6907。

(17) 前嶋 1967，pp. 101-102。

(18) Ecsedy 1980，pp. 36-37；Beckwith 1987，p. 126。ただしセミレチエでのカルルク勢力の拡大には、次節以下に見る西遷第二波のことを念頭に入れなければならないが、従来の研究にはこの視点が欠けている。

クの戦闘について伝えており、そしてその後の西面1行目から2行目にかけて次のような記述が見られる。

シネウス碑文・W-1~2⁽²⁰⁾

(1) ー前略ー qarluq bod q-欠ー ančip säkizinč ay üč yañıqa

カルルクの部族は ——— それで 8 月 3 日に

yor[iđim?] ー約57字欠ー [qar]luq tirigi barip türgiškä
私は進軍した? カルルクの生き残った者は行って チュルギシュに

k[irti?] ⁽²¹⁾ yana tüšip
入った。 再び 止まって

(2) onunč ay [iki?] yañıqa bar[dī]m ー中略ー anta [ya]qyaru basmıl
10 月 2 日に 私は行った。 その時以後 パスミルと

qarluq yok boltı qoñ yılqa ー欠ー
カルルクは 滅亡した。 羊の 年に

この部分に見られるようにカルルクの滅亡を伝える記述の直後には「羊の年」という記年がある。この「羊の年(755)」以前の記年は、東面8行目末尾から9行目初頭にかけの「兎の年(751)、5

月」までさかのぼり、その間の東面10ー11行目及び南面は欠落した部分が多いこともあって、その記述のはっきりとした年代を特定することは困難である。しかしその間には手掛かりとなるいくつかの日付と夏営の記述が含まれているので、それらを用いて年代の特定を試みてみようと思う。

シネウス碑文に見える「兎の年」と

表 - 1

E-8~9	兎の年(751) 5月・・・A
E-9	夏営の記述・・・B
S-1	11月18日・・・C
S-2	夏営の記述・・・D
S-5	5(?)月26日・・・E
S-6	8月・・・F
S-11	11月20日・・・G
W-1	8月3日・・・H
W-2	10月2日・・・I
W-2	羊の年(755)・・・J

(19) cf. 羽田 1957, pp. 198-199.

(20) Ramstedt 1913, pp. 32-33.

(21) この部分はクローソン氏の解釈に拠っている。ラムシュテット氏はここを [qar]-luq tirigi barı türgiškä k[älti?] としているが、クローソン氏の解釈の方が文脈から見て正しいと思われる。Clouston, G., *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish* (以下 ED と略す), p. 543b; Ramstedt 1913, p. 33.

「羊の年」の間の日付及び夏営の記述を順に列挙すると表－1 になる。この表から明らかなことは、C と D の間、そして G と H の間において年が改まっているということである。従って「兎の年」から「羊の年」の間の4年間にそれぞれの記述を当てはめれば、B・C は751～752年、D・E・F・G は752～753年、そして H・I は753～754年のことであると予想することが可能であろう。さらに年代特定の可能性を探るために、表－1 中の B の夏営の記述とタリアト碑文の記述を検討してみようと思う。以下、初めにシネウス碑文の「虎の年」から B の夏営までの記述、次にタリアト碑文の関係する記述を引用する。

(22)
シネウス碑文・E-7～10

- (7) ー前略ー ančip bars yılqa čik tapa yoridim ikinti ay
それで 虎の年 Čik に向けて 私は進軍した。 2 月

tört yigirmikā kāmā
14 日 に ケム河で

- (8) toqīdīm ol y[il?] ー10字欠ー kd/č/nt///z baši anta aqsīraq
私は打ち破った。その年? …… の水源 そこにて立派な

(23)
ordu örgin anta ititdīm čit anta toqīdīm
牙帳 と 王座をそこにて私は設立させた。 柵をそこにて私は作らせた。

yay anta yayladīm yaqa anta yaqaladīm bālgūmin
夏 そこにて私は夏営した。 境界を(24)そこにて私は作った。 私の印を

bitigimin anta yaratīdīm ančip ol yıl kūzin ilgārū
私の碑文を そこにて私は造らせた。それで その年 秋に 東方へ

yoridīm tatarīy aytdīm tabišyan yıl
私は進軍した。 タタールを私は詰問した。 兎の年

- (9) bišinč ayqa? tāg[i?] ー20字欠ー…qa ötükān yīš baši anta
5 月に[至るまで?] ウチュケン山の 水源 そして

(22) Ramstedt 1913, pp. 21-23.

(23) ラムシュテット氏のこの部分の註及び ED, p. 95 はここを qasar qurīdan と転写し「Qasar の西で」と翻訳している。この部分の解釈に関しては私自身確信がないので、ここでは当面ラムシュテット氏の本文中の解釈に従っておく。Ramstedt 1913, p. 53; cf. Klyashtorny 1982, pp. 339-340.

(24) この部分の「境界」が具体的にどういうものなのかは明らかではない。

//ŋz baši anta iduq baš kidintä yabaš tuquš bältirintä
…の水源 そして İduq-baš の西で Yabaš 河とTuquš 河の合流点で

[anta] yayladım örgin anta yaratıtdım čit anta
[そこで] 私は夏営した。 王座をここにて私は造らせた。 柵をここにて

toqıtdım bñ yilliq tümän künlik bitigimin bälğümin anta
私は作らせた。 千年続く 万 日続く 私の碑文を 私の印を ここにて

yaši tašqa
平らな石に

- (10) yaratıtdım —後略—
私は造らせた。

(25)
タリят碑文・W-1 ~ 3

- (1) täñridä bolmıš il itmiš bilgä qayan il bilgä qatun qayan atıy qatun
Täñridä bolmıš il itmiš bilgä qayanと Il bilgä qatun は可汗の名を 可敦

atıy atanıp ötükan kidin uçinta täz başınta örgin
の名を名付けられてウチュケンの 西の 端にて Taz 河の水源にて 王座を

—14字欠— anta yaratıtdım bars yılqa yılan yılqa iki yıl
ここにて私は造らせた。 虎の年に 蛇の年に 2 年

yayladım
私は夏営した。

- (2) ulu yiliqa ötükan ortusinta as öñüz baš qan iduq baš kedinintä
龍の年にウチュケンの中央で As-öñüz-baš と Qan-iduq-baš の西⁽²⁶⁾で

yayladım örgin bunta yarat(it)dım čit bunta
私は夏営した。 王座をここにて私は造らせた。 柵をここにて

toqıtdım bñ yıl(l)ıq tümän künlik bitigimin bälğümin bunta
私は作らせた。 千年続く 万 日続く 私の碑文を 私の印を ここにて

- (3) yaši tašqa yarat(it)dım tulqu tašqa toqıtdım
平らな石に 私は造らせた。 完全な? 石に 私は作らせた。

(25) Tekin 1982, pp. 49, 50; Klyashtorny 1982, pp. 341, 343-344.

(26) クリヤシュトルヌイ氏はこれを sünüz başqan iduq baš と転写し「Sünüz Başqan の聖なる高地」と翻訳しているが、私はテキン氏に従っての本文中のように転写しておく。 Klyashtorny 1982, pp. 341, 343-344.

上に挙げた記述の中でまずシネウス碑文東面 8 行目にある、「虎の年」に牙帳と王座を造り、そこに夏営したという部分に注目したい。タリят碑文西面 1 行目にも王座を造り、「虎の年」と「蛇の年」にそこで夏営したという記述が見られ、その場所はウチュケンの西の端、Täz 河の水源の地域であったと記されている。シネウス碑文ではこの年に夏営した場所を示す部分は碑面の状態が悪く地名を復元するのは困難であるが、タリят碑文にあるように「虎の年」に王座を造って夏営した場所がウチュケンの西端、Täz 河の水源地域だと仮定して残された文字を検討してみよう。タリят碑文の ötükan kidin učinta täz başınta という部分とシネウス碑文の -kdč/nt///z baši anta という部分のルーン文字のテキストを比べると次のようになる。⁽²⁸⁾

↓○↑ΥδΗk: ↓○↑人>✕×: ✕BkH ←タリят碑文 W-1

↓○: ↑ΥδΗ... ✕・人・✕×... ←シネウス碑文 E-8

実際に実物を見ることができないので断言することはできないが、このように並べてみるとシネウス碑文東面 8 行目の欠損部を [ötükan] kidi[n u]č[i]nt[a tä]z baši anta と復元することは決して不可能ではないと考える。そうなればシネウス碑文とタリят碑文のこの部分からは共に「虎の年」にウチュケンの西端、Täz 河の水源で王座を造り、そこで夏営したという内容を読み取ることができよう。⁽²⁹⁾

つぎにタリят碑文西面 2 行目の「龍の年」に夏営して、そこに「柵」を作り、碑文を建てたという部分、及びシネウス碑文東面 9 行目の夏営して(表-1 中の B)、そこに「柵」を作り、碑文を建てたという部分に注目したい。これらの部分のウイグル語表現を比較してみると、「私の碑文を (bitigimin)」, 「私の印

(27) クリヤシュトルヌイ氏によるとこれは現在の Tes 河でありハンガイ山脈に源を持ちモンゴリアからトゥバへと流れている河川であるらしい。Klyashtorny 1982, p. 346, n. 2; cf. Tekin 1982, p. 55, n. 42.

(28) シネウス碑文のルーニクテキストは Ramstedt 1913, p. 22, タリят碑文のルーニクテキストは Шинэxүү 1975, p. 54 による。

(29) この部分に関してクリヤシュトルヌイ氏も同じ解釈をしているようである。Klyashtorny 1982, pp. 339-340.

を (bälgümin)」という語句の語順が入れ代わっているだけで、その他の表現は完全に一致している。ここで問題となるのはそれぞれの夏営地の記載である。シネウス碑文の方は夏営地の位置をウチュケン山の水源、(不明)の水源、İduq-baş の西で、しかも Yabaş 河と Tuquş 河の合流点と記している。一方タリят碑文は、ウチュケンの中央、As-öñüz-baş, Qan-iduq-baş の西で夏営したと記している。これらの地名の中でシネウス碑文の Yabaş 河と Tuquş 河の合流点という記述は前の三つの地名で表した場所を言い換えているだけなので除外するとして、この二つの碑文に見えるそれ以外の三つの地名は同じ場所を表していると考えられないであろうか。まず最初の「ウチュケン山の水源」と「ウチュケンの中央」は水源と中央の違いはあるが、この語句が意味している場所はほぼ同じと見てさしかえないだろう。次の「(不明)の水源」と「As-öñüz-baş」とは前者が欠落しているために比較はできないが、残っている文字が「//ñz başı」であることから両者同じものである可能性が高い。そして最後の「İduq-baş」と「Qan-iduq-baş」においては İduq-baş という地名が一致しており、これは翻訳すると「聖なる泉」という意味の一般的な地名である。しかし両者とも古代遊牧トルコ民族の「聖なる山」ウチュケン山の付近であることは間違いなく、ウイグルの牙帳もこのウチュケンの地に置かれたことを考慮すれば後者は単に「汗の聖なる泉」と詳しく記しているだけであり、やはり同じ場所を表していると考ええる。このような推測はそれぞれに問題は残るものの、三つを総合して考えれば両碑文に記された位置が同じものである可能性は高いのではなからうか。

さらにシネウス碑文の現存部分の中で碑文を建てた事を伝える記述は、この東面 9 行目の記述以外には先の引用文中の東面 8 行目の記述しか見られない。8 行目の記述は「虎の年」のことであり、9 行目の記述は前にみたように 751 年（「兎の年」）或いは 752 年（「龍の年」）のいずれかの可能性しかありえない（表-1 中の B 参照）。一方、タリят碑文の中で碑文を建てた事を伝える記述は西面 2 行目の先に触れた部分一箇所のみである。磨延啜の紀功碑であるという両碑文の性格を考慮すれば、碑文を建てるというウイグルの国家にとっての重要事

が行われた夏営について一言も

表 - 2

言及されないということは考えられない。「虎の年」に関してタリят碑文では碑文を建てたことを伝える記述は見られないものの、王座を設立したことをうかがわせる記述を見ることができる。そのことを念頭に置いてタリят碑文を見ると、タリят碑文には「兎の年」に関する記

E-8～9	A	兎の年 5月	兎の年 (751)
E-9	B	夏営の記述	龍の年 (752)
S-1	C	11月18日	
S-2	D	夏営の記述	蛇の年 (753)
S-5	E	5(?)月26日	
S-6	F	8月	
S-11	G	11月20日	
W-1	H	8月3日	馬の年 (754)
W-2	I	10月2日	
W-2	J	羊の年	羊の年 (755)

述が全く現れないことから、シネウス碑文東面9行目の記述を「兎の年」のこととするのは不自然であろう。一方この記述を「龍の年」の出来事とすると、前に見たような夏営地の地名の問題は保留するとしても、その他の記述が全く一致していることからこのほうがより自然であると考え、従って以上のようなことからシネウス碑文東面9行目の夏営の記述(表-1・B)は「龍の年」の出来事⁽³⁰⁾であると考えることができよう。この考えに従って表-1中の記述の年代を考えるとその年代は表-2のように特定できる。故に本節の最初に挙げたカルルクのチュルギシュに向けての西遷は「馬の年」(754)の8月4日から10月1日の間に起こった出来事であると確定したい。

第三節 シネウス碑文南面1～7行目に見えるカルルクの位置

次にシネウス碑文の南面1～7行目で磨延啜が戦っているカルルクは前に挙げたようなウチュケン地方・アルタイ地方・セミレチエ地方の三つの勢力のうちのいずれに相当するののかという問題について考えてみたい。ここではそこに現れるいくつかの地名がその手掛かりとなる。その記述を挙げてみよう。

(30) この点に関してクリヤシュトルヌイ・テキン両氏とも結果的には私と同じ解釈をしていると思われる。

シネウス碑文・S-1～2⁽³¹⁾

- (1) ー前略ー ärtiš ü[güzüg] arqar baş tušī anta är qamış altın [ya]nta
 イルティシュ河を Arqar-baş の対岸そして Är-qamış の 下 方 で
 sa[[lap] kăčdim bir yigirmінč ay sākiz yigirm[ikā] //// [y]oluqd[im]
 筏に乗せて私は渡った. 1 1 月 1 8 日 に…私は出会った.
 bo[[lčü ügüzdä üč qarluqiy
 ボルチュ河 で 三姓 カルルクを

- (2) anta toqīdim anta yana tūšdim ー後略ー
 そこで 私は打ち破った. そこで また私は止まった.

シネウス碑文・S-7⁽³²⁾

- (7) ー前略ー -nč ay bir otuzqa qarluqiy // yoyra yarišda süsin
 ? 月 21日 にカルルクを Yoyra yariš にてその軍を
 anta sančdim äbi on kün öñrä ürküp barmış
 そこにて 私は敗走させた. その家は 10 日 前に 恐れて立ち去った.
 anta yana yorip tūšdim ー後略ー
 そこでまた 進軍して私は止まった.

まずシネウス碑文南面1～2行目の記述に見える地名の中で Ärtiš 河, Bolču 河という二つの河川名に注目したい. 前者は現代でもその名が知られているイルティシュ河の支流, カラ・イルティシュ河であり, アルタイ山脈に源を発し, 同山脈の西麓を北流している. もう一つの Bolču 河について, この河川名は突厥第二可汗国時代の碑文であるトニユクク (Tonyuquq) 碑文, キョル・テギン (Köl-tigin) 碑文, ビルゲ・カガン (Bilgä-qayan) 碑文にも見ることができ⁽³³⁾, その中の記述では, どちらもアルタイ山脈を越えイルティシュ河を渡ってこのボルチュ河に達している. このことに関して内藤みどり女史はトニユクク碑文の記述においてカラ・イルティシュ河を渡って夜間に行軍した突厥軍がボルチュ河に到達したのは曙の頃であるためこの河はカラ・イルティシュ河から4～5時間の騎行で到達する地にあるとし, それはウルングル (Ulungur) 湖付

(31) Ramstedt 1913, pp. 24-27.

(32) Ramstedt 1913, pp. 28-29.

(33) 小野川 1940, pp. 52, 55, 75, 76. (トニユクク碑文 IN-35, キョル・テギン碑文 E-37, ビルゲ・カガン碑文 E-28); cf. Ramstedt 1913, pp. 56-55.

近ではないかと推測されている。⁽³⁴⁾ いずれにしてもこの河はアルタイ地方のカラ・イルティシュ河の支流という見解で一致しているようである。このようにこの二つの河川は共にアルタイ山脈南西麓に位置すると考えることができるのである。三つめの Yoyra yarıš に関してはそのはっきりした位置は明らかではないが、それに似た地名としてトニユクク碑文にはヤリシュ平原 (Yarıš yazı) という地名を見つけることができる。それは東突厥の軍がチュルギシュへ向けて遠征した際の記述であり、以下のような文脈で現れる。

トニユクク碑文 I N - 11 ~ II W - 1 ⁽³⁵⁾

(I N - 11) ー前略ー altun yışıy yolsizin aşdıımız ⁽³⁶⁾ ärtis ügüzüg
アルタイ 山を 路なく我等は越えた。イルティシュ河を

käčigsizin käčdimiz tün aqıtdımız bolčuqa tañ öntürü
浅瀬なく我等は渡った。夜我等は進んだ。ボルチュに 曙の 頃

täğimiz

我等は着いた。

(II W - 1) tiliy kälürti sabı anday yarıš yazıda on
情報を彼はもたらした。 その語は 此の如し。 Yarıš 平原にて 十

tümän sü tärilti tir ー後略ー
万の軍が 集まったと。

ここに見えるようにヤリシュ平原はアルタイ山脈を越え、イルティシュ河を渡り、ボルチュに達した東突厥軍のさらに先の方に位置し、そこにチュルギシュの軍が集合している場所である。岩佐精一郎氏はこれをボロタラ (Borotala) 方面のチュルギシュ根拠地に近い要地であると推測し、漢文史料に見える「邪

(34) 内藤 1988, p. 250, n. 81. なお現在の地図にはイルティシュ河の支流に Бурчун なる名を見つけることができるが、これが当時のボルチュ河に当たるかどうかは定かではない。

(35) 小野川 1940, pp. 75-76; 内藤 1988, pp. 243-244.

(36) 小野川氏はこの語を qatdimiz と転写して、動詞 qat- + 過去一人称複数語尾と解釈し、「我等続けたり」と翻訳しているが、ED によると動詞 qat- の意味は「混ぜる、加える」であり、ここでは動詞 aqıt- 「流す、急襲するために…を送る」+ 過去一人称複数語尾とする内藤女史の解釈のほうが相応しいであろう。ED, p. 594; 81.

羅斯川」に比定している。⁽³⁷⁾ また内藤女史もこのヤリシュ平原を岩佐氏と同じく「邪羅斯川」に比定しているが、その位置はタルバガタイ (Tarbagatai) 山脈の南のエミル (Emil) 河流域であったと考察している。⁽³⁸⁾ 内藤女史の考察は十分に納得し得るもので、私もそれに従いたい。このヤリシュ平原とシネウス碑文中の Yoyra yariš とが仮に同一の地域であるとするならば、シネウス碑文に見えるウイグルとカルルクの戦いはトニユクク碑文に見える東突厥軍のチュルギシュ遠征の進路と同じく、カラ・イルティシュ河を渡り、ボルチュ河でカルルクを破り、その翌年さらに西方のエミル河流域でカルルクと戦ったと考えることができるのであるが、残念ながら今のところ Yariš yazı と Yoyra yariš の関係を示すことは不可能である。しかし前に見たような二つの河川名がアルタイ地方のものであることから、Yoyra yariš の位置は保留するとしても、このシネウス碑文南面 1～7 行目のカルルクがアルタイ地方に存在する勢力だと断言してもさしつかえないと考える。

第四節 カルルクの二度目の西遷と漢文史料との関係

以上の考察の結果、シネウス碑文南面 1～7 行目に現れるカルルクはアルタイ地方の勢力であり、それが 754 年にその地を離れてチュルギシュの地に西遷したことが確認されたわけであるが、このことは漢文史料に見える唐朝へのカルルクの朝貢の記述からも裏付けられる。ここで漢文史料に見られる天宝 5 載⁽³⁹⁾ (746) 以降のカルルクの朝貢の記述を全て列挙してみよう。

〔天宝五載十月〕三葛邏祿苾伽葉頓護阿波移健啜，遣使朝貢。

(『冊府元龜』・朝貢 4)

(37) 岩佐 1936, pp. 160-161, n. 76. この Yariš 平原 = 「邪羅斯川」説に対して松田氏とシャバンヌ氏は「多羅斯川 (Talaz)」 = 「邪羅斯川」説を取っている。松田 1970, p. 347, n. 71; Chavannes 1941, p. 64, n. 2.

(38) 内藤 1988, p. 254.

(39) ここで検索したのは主に『新・旧唐書』本紀・突厥伝・回鶻伝、『資治通鑑』唐紀、『冊府元龜』外臣部である。『冊府元龜』中華書局出版・第12冊, pp. 11412-11414; 11458.

[天宝十一載] 二月丙申，三葛邏祿遣使來朝，賜錦袍・金鈿帶・魚袋七事放還蕃。 (『冊府元龜』・褒異2)

[天宝] 十一載三月，三葛邏祿使來朝。 (『冊府元龜』・朝貢4)

[天宝] 十一載十一月，三葛邏祿遣使來朝。 (『冊府元龜』・朝貢4)

[天宝十二載] 四月，三葛邏祿遣使來朝，凡一百三十人分爲四隊相繼而入。各授官賞恣請求，皆令滿望。 (『冊府元龜』・朝貢4)

[天宝十二載十二月] 葛邏祿及石國遣獻方物。 (『冊府元龜』・朝貢4)

これを見ても明らかなようにカルルクの朝貢は特に天宝11～12載(752-53)に集中している。そして天宝12載12月を最後にそれ以後のカルルクの朝貢を示す記事は見当たらない。そこでこれまでの考察と第一節冒頭に引用した『新唐書』回鶻伝葛邏祿条に見られる「限廻紇故朝會不能自達于朝」という記述とを合わせて、この事実について考えてみよう。

シネウス碑文南面1～7行目でカルルクとウイグルの戦闘が伝えられているのは私の年代特定によると752年からであり、カルルクの朝貢が頻繁になった天宝11載と時期的に一致する。またアルタイ地方に残っていたカルルクがウイグルの圧迫により西遷したのは754年の8月～10月の間の出来事であり、これもまた天宝12載12月以後朝貢が絶えている事実と符合する。従って天宝11載から天宝12載12月までの間にカルルクが頻繁に朝貢しているのはウイグルによる圧迫と何らかの関わりがあり、天宝12載12月以後朝貢が絶えているのは唐と直接的な位置関係にあるアルタイ地方を捨てて西遷したからであると推測することができるであろう。

おわりに

以上で考察したことをここで再度まとめることにする。

1. シネウス・タリウト碑文に見られる最初のカルルク西遷は746年のことであり、この時以後、カルルクの勢力はアルタイ地方、セミレチエ地方、ウチュケン地方の三つの地域に存在した。ウチュケン地方のものはウイグルに服

属し、アルタイ地方のものは葉護を君主として少なくとも753年までは独立を保っていた。そしてセミレチエ地方に西遷したものは751年のタラス河の戦いでアラブ軍に寝返り、その勝利に貢献した。

2. シネウス碑文の二度目のカルルク西遷の記述はその前後の記述をタリヤト碑文の記述と比較検討することにより754年の出来事だと特定することができる。またこの時西遷したカルルクはそれまでアルタイ地方を根拠地としていたものである。そしてこのことは漢文史料においてカルルクの唐への接触が753年12月を最後に途絶えていることと大いに関係があると思われる。

この様にカルルクの西遷は746年と754年の二度にわたって行われたことが確認された。しかしカルルクの西遷に関してはこの他にも、先に西遷したものと遅れて西遷したものととの勢力関係やその後の主導権の問題等、解明すべき課題も数多く残されていることを付け加えて結びに代えることとする。

文献目録

[欧文]

Barthold, W. W.

1899 “Altürkischen Inschriften und die arabischen Quellen.” In: Radloff, W., *Die altürkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge, St. Petersburg, pp. 1-29.

1968 *Turkestan down to the Mongol Invasion*. Third Edition, London.

Beckwith, C. I.

1987 *The Tibetan Empire in Central Asia*. New Jersey.

Chavannes, E.

1941 *Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux*. 2nd ed. Paris.

Clauson, G.

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford.

Ecsedy, I.

1980 “A Contribution to the History of Karluks in the T'ang Period.” *AOH* 34, pp. 23-37.

Klyashtorny, S. G.

1982 “The Terkhin Inscription.” *AOH* 36, pp. 335-366, — 17 pls. (pp. 348-366)

Pritsak, O.

1951 “Von den Karluk zu den Karachaniden.” *ZDMG* 101, pp. 270-300.

Ramstedt, G. J.

- 1913 “Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei.” *JSFOu* 30-3, pp. 1-63, + 3 pls.

ШИНЭХҮҮ, М.

- 1975 *Тариатын Орхон бичгийн шинэ дурсгал*. Улаанбаатар.

Tekin, T.

- 1982 “The Tariat (Terkhin) Inscription.” *AOH* 37, pp. 43-68.

[和文・中文]

岩佐精一郎

- 1936 「突厥の復興に就いて」, 『岩佐精一郎遺稿』, 東京, pp. 77-167.

内田吟風

- 1975 「初期葛邏祿 (Karluk) 族史の研究」, 『北アジア史研究・突厥篇』, 同朋舎, 京都, pp. 495-509. (原載: 『田村博士頌寿東洋史論叢』, 1968, pp. 57-70)

王 静如

- 1938 「突厥文廻紇英武威遠毗伽可汗碑譯釋」, 『輔仁學誌』7-1・2, pp. 186-240.

小野川秀美

- 1943 「突厥碑文譯註」, 『滿蒙史論叢』4, pp. 1-177.

片山章雄

- 1984 「突厥第二可汗国末期の一考察」, 『史朋』17, pp. 25-38.

岑 仲勉

- 1958 『突厥集史』上・下, 中華書局.

薛 宗正

- 1991 「葛邏祿の崛起及其西遷」, 『新疆大學學報』19-2, pp. 71-79.

内藤みどり

- 1988 『西突厥史の研究』, 早大出版部, 東京.

羽田 亨

- 1957 「唐代回鶻史の研究」, 『羽田博士史学論文集』上巻, 東洋史研究会, 京都, pp. 157-324.

前嶋信次

- 1967 「タラス戦考」, 『東西文化交流の諸相——民族・戦争』, 誠文堂新光社, 東京, pp. 41-112. (原載: 『史学』31-1/4 ~ 32-1, 1958-59)

松田壽男

- 1970 『古代天山の歴史地理学的研究・増補版』, 早大出版部, 東京.

略号表

AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Budapest.

JSFOu: *Journal de la Société Finno-Ougrienne*.

ZDMG: *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Wiesbaden.